

〈ひろがる輪・麻の花会・敬和会〉

史料室の仕事より

高等部長 宇佐見 邦 輔

東洋英和女学院のキリスト教教育については『東洋英和女学院百年史』に「戦後のキリスト教教育」という一節があり、また「創業期のキリスト教教育」という部分も存在する。また『東洋英和女学院七十年誌』には『宗教教育七十年』が奥興牧師の手によって書かれ、『東洋英和女学校五十年史』には「宗教教育」という比屋根ゆき子氏の文章があって、創立時からの宗教活動の概況が偲ばれるのである。また『史料室だより』23号は戦後のキリスト教教育を特集記事として掲げ、幼稚園（荒牧富士子氏）、小学部（伊藤博正氏）、中高部（奥興、水野誠の両氏）、短大（十時英二氏）について、各氏の文章が載せられている。高等部に残されている資料の中には、「月中行事表」（昭和28年4月より数年間）「教務日誌」（昭和28年4月より）「宗教教育日誌」（昭和33年6月より数年間）「コイノニアの日誌」（1958年1月より数年間）「宗教委員会ノート」「RAC関係の記録」等があって、戦後の一時期の宗教活動の状況を伺うことが出来る。

英文学専攻科入学式始業式午前9時より（昭和28・4・15）母の会総会午前中授業参観（昭和28・5・19）星野教諭女子分娩母子共健全（昭和28・5・21）キャンプ講習会（職員）YMCA竹内女史於食堂放課後（昭和28・6・16）昼食時キャンプ委員会（昭和28・6・30）山梨英和（学院）長内藤正隆氏就任（昭和28・9・28）短期大学英文科増設許可申請書類提出（昭和28・9・30）

七十周年第一回協議、院長部長井上（昭和28・12・14）ミスハミルトンに話を聞く会（昭和29・7・6）麻布中学校相模湖遭難事件（昭和29・10・8）麻布に講堂貸す（昭和30・1・29）宗教教育日誌1958年6月5日はじめてこの日誌が作られ記入を始める（昭和33・6・5）新任挨拶太田代、東條、乾、ミスブラウン（及びミスサンダース）専任栗原、鳥居教諭、図書佐伯教諭、休職相沢教諭……（昭和34・4・7）等々、これらの日常的記録、周辺の記録、人事の諸記録の中に、現在に継続される宗教活動が定着しつつあることが伺われるが、これと共に旺盛な活動意欲とまた一つ一つの行事について、諸準備と打合せ、講師の選択、仕事の分担、生徒に対する牧会的配慮など、労苦のあとがありありと知られるのである。花の日の礼拝について「花の手配が間ぎわ過ぎて大変だった。引率教師仲々決まらず或程度名指して依頼しなければだめ」「ここ数週間来コイノニアが折角集っても内容ある集会が出来ず、失望を与えたためか、使徒信条研究会に出席者が激減して心配」「全院協議会で仲々活発に意見がかわされたが、毎年結局同じ意見をくり返しているようである」「明日は見学遠足明後日は感謝祭などで非常に忙しい。こういう忙しい行事行事の中でどれ丈本当のものを伝え或いは与えていけるか考えさせられる」お見舞の「果物分配などであれこれと心をくばり結局半日以上かかってしまい疲れに疲れる。しかし引率の先生も協力して下さり、19ヶ所に分

れて出発」 「職員会でクリスマス祝会のことで非常にもめる」といった具合である。三十年前の記録である。

さて歴史は昨日の知恵と今日の知恵との対話というが、この時代と現在では時代の背景も変り、人々の意識構造にも大きな変化が生じた。しかしキリスト者のいとなみ、宗教教育などというものは水野誠氏も語られたように、「水の上にパンを投げる」(伝道の書11-1)仕事かも知れない。いつどの様にどの様なかたちで神がその収穫を与

え給うのかわからない。われわれは種子まきの仕事を続けなければならない。土壌を耕やし豊かにしなければならない。そして昨日の知恵をさぐるためには多くの場合、原史料が必要となる。また明日の人のためには、現在の兄弟姉妹たちの多くの誠実と努力の跡を、少なくともそのいくばくかを残しておかなければならない。その様に私は思うのである。皆様のご協力をお願いしたい。これが史料室からの心からの願いである。

麻の花会誌 記録より

大正八年より始まった麻の花会は、昭和56年5月迄続いた同窓生有志の集りである。東光会とは別に、同窓会のような働きをしていた。会の活動は会員の親陸から、聖書研究会、母校の為の援助活動、社会事業への参加のみならず、同窓生に、華美の風潮をいましめる手紙を出す等多岐に渡っている。百年史や東光会の記録にも取り上げられているが、今回は、会員の回想記と、当時の書記の記録を再現してみた。

云うお話だったが私共もイエスの御言葉に従ってしっかり自立する様にとのおすすめだった。

高木勝代記

母校の院長石井次郎先生をお迎えして

1973年11月19日 出席者16名

珍らしく澄みきった秋空の一日、石井先生をお迎えするというので一同老いも忘れて早くから集る。正午近く先生御到着。いつもの「日々の糧」を歌い、大堀さんの食事の祈り、そして用意され

大村先生をお招きする

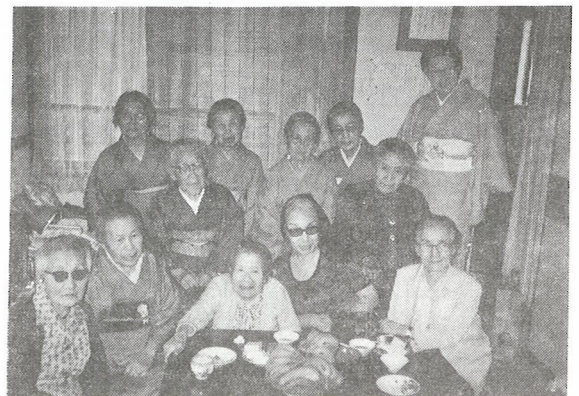
1973年10月25日 出席者 14名。

麻の花会10月例会に阿佐谷教会牧師大村先生をお招きして聖書のお話を伺う。

はじめお食事を先生と御一緒にして午後からお話を伺う。讃美歌 (403)

聖書(ヨハネ5:2-9) 栗原 寿子

大村先生のお話。38年間も病気をわづらった人がベテスタの池のほとりて水が動く時誰かが自分を池に入れてくれるのをまって居たが誰れも入れてくれる人がないと云うので横たわって居る所へイエスが来られ、それを見て憐れんで「なおりたいか」と声をかけて下さって「立って歩め」と仰せられたら、たちどころに歩ける様になったと



井上 大堀 高木 藍原 出羽 佐田 昭和56年5月
湊 栗原 高木 池田 征矢野
勝代

た食事をいただきながら暫し厳しかったブラックモア先生のお話に花が咲く。讚美歌403番。
麻の花会の歩みを栗原さん朗読。「創立者水野菊子様はどういう方でしたか」の先生の御質問に何人かの方々が憶い出を語られた。誰からも慕われた方、誠に優しい方、そしてキリストの愛の実行者だった。このようなお方を先輩と又先生と仰ぐ私共は倅せだ。私共も残り少ない人生を水野先生に倣って行きたい。石井先生は御繁忙のお時間をさいて麻の花会をお訪ね下さった。先生の御母堂の御信仰——わたしはあなた方を捨てて孤児とはしない——という聖句は深く心に刻まれました。
90周年を迎えるに当って母校の為に祈って欲しいと先生は云われた。母校が私共の身近に戻った感じがだ。 高木喜美子記す

麻の花会の想い出

大正5年卒 井上茂登 88才

麻の花会は私など子供の頃から尊敬申し上げておりました初期英和ご出身の水野きく先生が創始者でありまして、戦前戦後までつづきました楽しい会でした。戦争中は一時とだえておりましたが、戦後間もなく再び始めました。会場は西荻の高木勝代(私の姉)宅で毎回致しました。水野きく姉の令妹大久保信子姉が熱心に音頭をとって下さいました。会員数は初め20名近くありましたが、だんだん老令となり、亡くなられてすくなくなりました。年代の差はいろいろありましたが、皆同窓生で、寄宿通学の方もあり、話題が共通で、昔のお話などしては楽しみました。一番年長の方は林つる姉で、熱海などの遠方からご出席なされまして、皆さんのアイドルでした。最後の会合の時もご出席でした。現在は茅ヶ崎の“太陽の郷”にご入居中でございます。(95才)

会費を集めては時々施設などに寄附もしておりました。クリスマス祝会の時は、交換プレゼント

などしたり、松野しう姉(加茂先生の令妹)他一名で余興としてとても面白いかくし芸などして下さって一同を笑わせて下さった事を思い出します。春秋の気候のよい時には皆さんと小旅行などして楽しみました。大久保信子さんをリーダーとして野口綾子姉経営の旅館“鶴門”に一泊、マイクロバスで赤城山の上までもドライブの案内をされて、とても楽しかったのも思い出の種となっております。旅館での山菜料理もとても珍らしく美味しかったので忘れられません。以上拙文ながら思い出すまゝ記しました。(1987年7月)

東光会聖書研究会

「百年史」の東光会の項に聖書研究会始まるとして昭和24年2月2日のミス・ブラックモアの追悼会を契機に聖書研究会が提案され、宮城春江先生を長とし、毎月第二月曜日に聖研が開講されたこととある。当時の様子を高橋広子氏に電話で問い合わせた所、最年長は大正5年卒の平沢きく氏で、宮城春江先生の後には当時の熊野花子鳥居坂教会副牧師が担当し、昭和42年7月迄の記録が残っているとのことだった。参加者は10名前後、月会費30円で維持されていた。東光会館が使えた間はそこを会場としていた。熊野花子先生によると、旧約聖書を創世記から一章ずつ2~3回で一章を終えるようにしてマルコによる福音書迄で終了した。全員が必ず予習して来るので、その熱意にはげまされ続いたとのことだった。麻の花会より一世代若い方々が中心となっていたようだ。年代を超えた集りであり、卒業生有志で始められたが、麻の花会と異り、聖書研究会として東光会の活動の中に位置づけられ、会館の消滅と共に終了している。(文責 朽木)

「敬和会」——礼拝の恵みへの招き——

木山 房子

はじめに

1933年から1971年まで、鳥居坂教会の牧師であられた濱崎次郎先生が、「礼拝は神に対して人間のなし得る最高の行為である」と、ヨハネによる福音書4章21節から説いて下さいましたが、このみ言葉が敬和会の働きの中心となっております。

1987年8月「わたしたちの礼拝生活」という主題で行われた鳥居坂教会の全体修養会で、講師の近藤勝彦牧師（東京神学大学教授）が、このヨハネ4：21のみ言葉をテキストとして講演をはじめられた時、私はほんとうに大きな驚きを覚え、主が「敬和会」の負しい奉仕を強く支えて下さることを確信して、感謝にみたまされました。

実は、その2ヶ月ばかり前に、「東洋英和の史料室だよりに、敬和会についての小文を」と朽木先生からおすすめをいただいております。しかしながら、30余年「礼拝の恵み」を求めつづけての秘かな祈りを、東洋英和の中で公にすることは、今まで「母の会の同窓会のような集会」として認めて頂いて来た「敬和会」の真の姿を告白することであって、決断の要る事柄でありました。非力な私には、主のご摂理の不思議さを、誤りなく書き記すことは到底出来ないので。お引受けはしたものの、ずっと迷っておりましたが、修養会でいただいたこの同じみ言葉に導かれて、ありのままを公にする決意を与えられたのでございます。

生いたち

(1) 東洋英和での歩み

小学部でも中高部でも、1954年頃から母の会で宗教講演会が行われておりましたが、中高部母の会宗教部が1955年5月、小学部聖書の会

が1956年11月に創設されました。中高部は山北多喜彦先生はじめ諸教会の牧師先生方のご指導を仰ぎ、小学部は第1回から1968年7月まで、元部長外崎長三郎先生のご尽力で、殆ど一貫して山北多喜彦先生にお導きをいただきました。後に、幼稚園にも同じ趣旨の「つぼみ会」が生まれております。各部の記録によりますと「聖書の会発足の趣旨・教会出席はととも及ばないし、また時間的にも余裕のないお母様方のために、キリスト教の理解と伝道を目的とする。（小学部）」「教会での礼拝の機会を得られず、しかもキリスト教を理解したいと希われる会員のために（中高部）」——原文のまま——とあり、ミッションスクールに子供を入学させていただいた母親達の願いを、学校がお取りあげ下さったの、毎月の「聖書の学び」が、今に至るまで続いております。

一方、子供達が卒業した元母の会会員の有志によって、1966年5月から、目白の日本聖書神学校の礼拝堂を拝借し、「毎週の週日礼拝」が開始されました。丁度その頃、激化した学園紛争、教団紛争によって、折角の試みも次第に継続を危ぶまれていた折も折、山北多喜彦牧師は、まだ60才の若さでお召しを受けられたのでした。

当時院長であられた長野弥先生は、神学校を拝借する以前に、暫く幼稚園の旧園舎の二階を使わせていただいた時代がありましたので、「東洋英和の中に帰って来ては……」と強くおすすめになり、現在の幼稚園の園舎の二階を、毎月一回、週日礼拝を守るために拝借できるようにおはからい下さいました。そして中高部の聖書科の先生で、当時の銀座教会副牧師、後に6年間鳥居坂教会を牧会された深町正信先生にお説教をしていただき、山北宣久先生も責任を負って下さるようになりま

敬和会が、東洋英和の一隅を拝借することを許されるようになった時から、折にふれ案内のちらしを、もう何千枚か配ってはおりますが、このちらしからでは「週日礼拝」を理解していただくのは中々困難でございます。

礼拝こそ、私達が活々と生きるために、人間が最も人間らしく生きる源泉を与えられる時として、神様が備えて下さる時なのです。然し、日本の社会の現実、主の十字架と復活を記念する聖日（日曜日）の礼拝に与るには、幾重にも張り廻らされた障壁を乗り越えなければなりません。

1971年6月、日本キリスト教団の紛争が頂点にあった頃でしたが、私は「敬和会10号」ではじめて「週日礼拝」について触れ、「礼拝を捧げるといふことは、教会の建物の中、それも聖日のあの時間に限られたことなのでしょう」と問い、「教会こそ人間の本質の最も深い処において、その魂の成長を与えるところでありませぬ。然しながら、その教会の礼拝に、最も大切な時期の子供達をあづかる人々が、一体何人参加を許されているというのでしょうか」と問いかけました。

〈ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい〉と叫びつつける盲人が救われたように、私達はあらゆるしがらみと戦いながら、〈見えるようになること〉（マルコ10：51）を求めつけて行かなければならないと思います。「週日礼拝」が、教会の礼拝へと招かれるまでのステップとして、神様に用いて頂けるならば、ここで育てられた者達が、やむにやまれぬ祈りへと、主によって押し出され、やがて聖日の礼拝に招かれ、神の家族としての交わりに加えていただけることでしょう。「週日礼拝」は、教会の礼拝をないがしろにしているのではないかと、とか、神学的には…とか、厳しい批判を受けながらではあっても、神様がすべての罪をきよめて下さることを信じて「み言葉を下さい」「礼拝の恵みに与らせて下さい」

と、聖名を呼びつづけたいと思うのでございます。そのためには、奉仕者である世話人達が、それぞれの教会にあって、忠実な教会生活をするのを、最も大切にして努めなければならないと考えております。

活動と運営

東洋英和幼稚園の園舎を拝借しての「週日礼拝」は、毎月第3火曜日午後1時半から、前奏と礼拝への招きのことばによって始められます。奏楽は3人の姉妹が交替での奉仕です。「礼拝後の集い」はお茶を頂きながら、僅か30分が幾倍もの収穫のあるひと時でもあります。

4月のイースター礼拝、12月のクリスマス礼拝、8月には毎年東京YMCAを会場として、1日修養会を続けて来ました。新築の野尻キャンプサイトで、3泊4日の修養会を3年続けたこともあって、YMのボーイズ長期キャンプのキャンプファイヤーに加わった一夜の感激は、古いメンバーの記憶に焼きついております。

1年に1度は教会の礼拝堂を拝借して、パイプオルガンの奏楽をもって礼拝を捧げることにしてあります。この日の席上献金を教会にお捧げするほか、定期的に、国際愛隣学園（聖ヶ丘教会内）、全国教会青年同盟に献金させて頂き、クリスマス献金は、東京神学大学、聖ヶ丘教会、鳥居坂教会、東洋英和女学院、敬和学園に、ベテスダ奉仕女母の家には献品もそえてお送りしております。

第2火曜日は、鳥居坂教会教育会館二階を拝借して「連絡会」をいたします。午後1時から4時過ぎまで、集会の準備、集会案内や機関紙の発送、宛名書きなどのために、特定の誰々ということなしに、その時都合のつく人が誰でも自由に集まります。平均10余名で、少しでも効率のよい働きをと心掛けております。機動力を提供して下さる方、印刷技術を心得ている方などもあり、和気藹藹のうちに親睦を深める時にもなっております。

書記の方々は最近、機関紙のバック・ナンバーの整理をして下さいましたので、短期大学図書館からのご依頼を受け、早速1号からそろえてお納めすることが出来ました。従来から中高部と史料室にはお届けしておりますが、有難いことと存じております。

会計は、通常会計と特別会計に分け、維持献金（月額500円）と礼拝の席上献金が基本的に会の運営を支えています。後者は主として文書伝道のために支出し、有志の特別献金は、印刷費のために多大の貢献を頂いております。

20余年にわたる活動を、本当に多くの方々が資金面その他さまざまな処で援助をして下さいました。その大部分が、長野先生や太田先生が示された「かくれたところでの奉仕」であったことを感謝をもって書き留めておきたいと思っております。

文書伝道への祈り

機関紙「敬和会」の第1号を、深町夫人の鉄筆のご奉仕で発行したのは、1970年1月。以来17年を経て、最初30部だった発行部数は、3000部を越えるようになりました。

東洋英和の幼・小・中高の職員の方々と、在校生のご家庭、短期大学保育科学生のほかに、深町先生のご関係の方々、聖ヶ丘教会、鳥居坂教会、更新伝道会等でもご覧いただいております。

1面の説教は、主として山北先生が執筆されます。23号から「山上のおしえ」を講解していただいております。深町先生の「ジョン・ウエスレー」は47号で21回目となりました。毎回ウエスレーの研究者方が熱心に待っておられます。長野先生のご遺言で始めた「カナダ・メソジスト教会宣教師——その人となりと信仰——」は、12回となりました。先生はご召天の前年、宣教師方と親交のあったお方に手紙でお願いして下さい、日本宣教のために生涯を捧げられた宣教師の足跡を、「敬和会」の紙上に書き残す道を開いて下さ

いました。

17号(1974年)には、英和のご父兄であられた、東京神学大学教授(後に学長)大木英夫牧師が、「母は神を信じなければならない」をご寄稿下さいました。このことが契機となって、東神大の先生方や、諸教会の牧師、信徒、東洋英和の姉妹校の指導者の方々にもご執筆を頂くようになりました。ミッションスクールに子弟を送っている家庭に向けて、毎号諸先生のメッセージを届けることが許されるという、全くの素人の企画に過ぎない機関紙に与えられる素晴らしい思寵を、奇蹟を見る思いで編集に当たっているのでございます。

1968年9月、山北多喜彦牧師の告別説教「みこころを地に」。1970年3月には山北先生の遺講集「朽ちない冠」を出版いたしました。

「長野先生を囲む会」は、先生が東洋英和をご退任なさってから、鶴沼先生もごいっしょに、年2~3回、ご召天になられる前年まで続けられ、その結晶が「野尻・野外教育施設の由来」(1975年10月)でございませう出版にあたり石井次郎先生(当時の院長)は、珠玉の序文をもってキャンパスサイトの真価を確認して下さいさっぱりでなく、学生版の増刷のために、学校会計から100万円の援助を賜りました。

79年、80年、81年には、鳥居坂教会の修養会の講演3篇を、一旦「敬和会」紙上に収録した後、教会形成の基本的パンフレットとして、順次出版いたしました。松永希久夫牧師の「教会とは何か」左近淑牧師の「神の民とは——契約・十戒・選びについて——」川名勇牧師の「礼拝・奉仕・交わり・伝道」の3冊で、いずれも諸教会で用いていただくことができました。

1984年11月に発行された「東洋英和女学院百年史」には、「敬和会」誌から参考にされた記事が見られます。また1982年7月、36号に長野先生が「カナダ・メソジスト教会宣教師」

の第1回として寄稿され、それが先生の絶筆でもあった「ミス・マーサ・カートメル」は、「東光」の百周年記念号に用いられております。

46号以降には、「東洋英和女学院資料集・第1号」処女の「ミス・カートメルの手紙」の翻訳が、五味澄子姉によって進められています。

神の備え給う時

今年(1987年)の春「福音主義教会連合」の「証し」の欄に、「敬和会」の週日礼拝と文書伝道について次のように書かせていただきました。

「学校(ミッションスクール)が、子供達だけでなく、母親—家庭—のために、正しい福音理解の道を拓いて下さったことは、まことに画期的な事柄であったと思います。……聖書の告げる福音を正しく説いて下さる先生が与えられ、参加者にとっては、まさに、神の備え給う『時』でありました」

20余年、黙々として週日礼拝に通い続けられた敬和会のひとりの姉妹は、召天間近かの日に、病床洗礼を授けられました。死の床にあって、はっきりと信仰告白をされたその時まで、ご家族は、姉妹が何のために敬和会に喜々として参加されるのかを全くご存知なかったということを伺い、私たちは深く深く頷かざるを得ない思いがいたします。〈わが魂はもだしてただ神を待つ〉詩篇62:1のみ言葉に生きぬかれた姉妹の証しに、会員一同肅然と襟を正しました。日本の妻や母の中には、まだまだこのような求道者が溢れているのです。

〈父は、このような礼拝をする者たちを求めておられる〉 ヨハネ4:23

神様の方から私達を求めて下さるが故に、罪のただ中から、私達は救いへと導かれるのです。たとえ陰府にまで下っても、主は必ずその底辺にまで降って私達を支えて下さるのです。この無償の御愛による救いのよろこびを共に願うことが出来ますように、聖名によって建てられたミッション

スクールの働きの上に、ますます主のご栄光があらわされますようにと、週日礼拝に於て、絶えず祈らせていただきたいと願っております。

史料室 日誌から

1986. 3. 28(火) 11月から5ヶ月の17

日間は、短大が移転するので、主に、短大の印刷物を年度順、各番号順に資料の有無をチェックし、無いものは各部署から残部、残部のない場合にはコピーをして補充につとめた。しかし、まだ完全には集っていないものがある。これらの資料をクリアーブックに入れるものは入れ、又はV.F.等に入れた。しかしこれらのカード目録はとっていない。

資料を大まかに配列させて、現在ある分類表(史料室の)を再検討してから新しい分類表を作る。これは配列をきめることになるので、慎重に考えなければならない。分類=配列(配置)をきめてから、一点一点カード化して行こうと考える。

1986. 6. 10(火) 校歌制定の折、生徒から歌詞を募集した原稿の整理。当時の4・5年生(3年1名)の原稿を各年各組のアルファベット順に並べた。リスト作成。ファイルした。

1987. 10. 15(木) 本学年史を保存、予備とし、ケースIに移動、チェックしなおす。追悼記念日礼拝関係資料を100年準備室の資料と合せ充実させる。静岡英和の松縄氏より依頼平岩千代さんの資料コピーし送る。沢田明子さん、カナダ婦人宣教師の教育をしらべに来室。

(史料室 芝原 翠)

あとがき 宇佐見先生を新委員長に迎えて半年、やっと29号を纏めることが出来ました。林つる様が8月に昇天され、この号を御覧いただけなのが残念です。(中高部 谷川、浅見、朽木)